志賀直哉随聞記

桜井勝美著

宝文館出版

桜井勝美（さくらい　かつみ）
一九〇八年、北海道に生れる。
「麵麭」「昆侖」「時間」同人。
日本詩人クラブ、日本現代詩人会、日本文芸家協会、日本ペンクラブ会員。
現住所　〒一八〇　東京都武蔵野市吉祥寺本町三―二〇―六

© 1989

志賀直哉随聞記
一九八九年八月二十五日　初版第一刷印刷
一九八九年八月　三十　日　初版第一刷発行

著　者　桜井勝美
発行者　羽生和男

発行所　宝文館出版株式会社
東京都千代田区神田神保町三ノ一七
郵便番号一〇一
振替口座番号　東京五―二八〇
電話　〇三（二六一）四四〇九

印刷　（株）参陽社
製本　丸山製本所

ISBN4-8320-1345-9　Printed in Japan

志賀直哉随聞記

桜井勝美著

宝文館出版

志賀直哉随聞記

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I　志賀直哉随聞記

卒論がご縁で……11
始めての訪問……13
離れて就く……19
奈良の句会……23
ロダンについて……27
リアス式文体……32
書くのが苦手……36
田中英光の「野狐」をめぐって……42
「親友」・Detail と Whole……46
北川冬彦「どんぐりの実」……50
詩・俳句、そして短歌……55
副島種臣と榎本武揚……58

箱根の紀伊国屋旅館……63
「書」の日記から……71
「書」の骨法……77
米芾と耶律楚材……81
幸せな「母の大福帳」……86
志賀直哉日記の味……92
「暗夜行路」論——時任謙作とは如何なる人間であるか——……102

Ⅱ　こころに叶う作家、詩人たち

小林多喜二・投書家時代の詩……125
小熊秀雄と旭川の初メーデー……137
村野四郎の詩論について……142
江口渙のふるさと——一九八二年・生誕一〇〇年の烏山町……158
小野十三郎対談記……169

北川冬彦・中国、北鮮の旅……183
田中冬二訪問記……200
川路柳虹訪問記……214
ジャン・コクトオ瞥見……228
あとがき……234

志賀直哉隨聞記

I

志賀直哉随聞記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

卒論がご縁で

わたしが始めて志賀直哉先生のお宅をおたずねしたのは、昭和十四年（一九三九）一月二十九日であった。

この日、わたしは、「志賀直哉研究」という卒業論文を風呂敷につつんで、胸おどらせながら、いやおそるおそるお宅へうかがったのである。じつはかねて聞くところによると先生は、紹介なしではとてもお目にかかれないとのことであったからである。その頃、先生は高田馬場駅をおりて早稲田に向かい、少し行ったところを右にまがった淀橋区（現在の新宿区）諏訪町二二六番地に住んでおられた。

その前年の春からわたしは卒論について湯地孝、森本治吉両教授の指導をうけることになった。はじめわたしは、「梶井基次郎研究」をやるつもりで、北川冬彦氏やその他関係筋の方から可成りの資料をあつめ、カードの整理などもはじめていた。ところが湯地師から、「梶井基次郎のような、まだ評価の定まっていない作家を卒論の対象とすることは危険である。卒論というものはオーソドックスな、

しかも大物にとりくんで、それをグラインダーとして自己研磨することが本筋である。」と指導された。ところがちょうどその年の前年からその年にかけて、豪華な全九巻本の『志賀直哉全集』が改造社から刊行されていて、わたしはそれを予約購読していた。これには「暗夜行路」完結全篇も掲載されてあり、部分的にではあったが十代のころから先生の文学は愛読していたこともあり、湯地師の言にしたがって、早速卒論のテーマは「志賀直哉研究」ということに決定した次第である。

さて、先生の作品を一から読みなおしはじめたのだが、当時わたしは小学校につとめていたこともあり、なかなかはかどらず、またたく間に春はすぎ、夏は蚊帳のなかに机をもちこんでの奮闘を試みたが、論文を書きすすめる方向も定まらぬ状態であった。涼風のふくころになってから、ぶっつけ本番だが、どうやらペンが進むようになり、死にものぐるいでようやく書きあげたのが、翌年の一月二十三日であった。読み返すひまもなかったが、凡そ五〇〇枚の大論文？　を自分なりに書きあげることができたのである。ところで枚数ばかり多くて中身の貧しい論文に、何とか箔をつけようと思って考えついたのは、麻布三河台町十七番地の志賀家の写真をとって口絵にしようということであった。いうまでもなく「和解」その他多くの作品に出てくる所謂「麻布の家」「父の家」のそれである。

早速わたしは三河台を訪ねた。しかし家は代がわりして、清泉学院という花嫁学校になっていたが、学院の渡辺善次氏に来意をつげると、心よく広いお宅の中を案内してくれた。庭に面した畳敷きの広い廊下の左側の祖母の部屋は、花嫁教室になって、畳の上に幾十かの机と椅子、そして正面には黒板

という具合で、全くの教室になっていた。庭にはテニスコートが見られ、ふと麻布三連隊のラッパの音がきこえたりした。重厚なふすま戸、玄関のたたき、横からの入口……。わたしは志賀文学の熱っぽい、あるいは苦闘の現場を実感させて戴いたよろこびで一ぱいであった。

清泉学院を後にする時、渡辺氏にその旧志賀邸の冠木門から奥の正面玄関を見とおした写真を撮らせてもらう許しを得、さっそく六本木の写真屋をつれてきて撮影してもらった。

何しろ論文提出期限は一月三十一日、午後四時。論文の製本は大急ぎさせて出来上りが二十五日。その少し前に思いついたのが口絵の写真のこと。六本木の写真屋は出来上りには少くとも一週間かかるという。それでは困る、間にあわない。ねばりにねばって三日で仕上げてもらう約束ができる。二十七日にはそれが出来上ってきた。それを論文製本の口絵として丁寧に貼りつけた。すると論文に一段と貫禄がついたような気がしてきたのであった。

始めての訪問

製本屋はこんでいるから、その短日ではというのを無理に頼みこんで出来上ってきた『志賀直哉研

究』は金文字入りの総クロス貼り。厚さは十糎ほどもあるではないか。まさに大著述を完成した思い。そこへ写真屋に急がせて出来上ってきた志賀邸の写真を口絵として貼りつけると正に完璧の思い。縦にしたり、横にしたり、開いてみたり、ポンととじてみたり、それは狂気の沙汰にも見えることであったにちがいない。

その時、ふと頭にひらめいたこと。それはこれをそのまま大学へ提出してしまえば、再び戻って来ないという。惜しい。それならば一目だけでも志賀先生にお見せすることが出来たらという、わたしの野望は一気にふくれ上った。

翌日、わたしはその論文を大事に風呂敷に包んで、省線に乗り、高田馬場駅で降りた。

先生のお宅の正面の大きな開き扉は閉じられてあった。「志賀」とだけ書かれてある一見何気ない門札だが、それを見あげた時、足が思わず震える思いがしたが、思いきって傍の小扉をおして中へ足をふみ入れた。すると内庭に一台の自動車が停っていた。来客中のようである。しかしもう後へ退くわけにはいかない。目をつぶる思いでベルをおした。

するとすぐ、玄関の側戸があいて、ベージュ色のセーターに淡い灰色のスカートの美しい細そ身のお嬢さんが両手をついて、「どんなご用でしょうか。」と聞いてくれた。「ちょっとお待ち下さって。」と立上り奥へはいって行った。わたしには姿をはじめに見た瞬間、それが留女子さんであることがすぐに分った。

留女子さんはすぐに戻ってきて、「今お客ですが、ちょっとの間でしたら。」と云って、正面の玄関をあけてくれ、応接間へ通して下さった。

粛々応接間にはいると、先生はすでに立上ってわたしを待って下さっているような姿勢で、「みんな家の親類のものだ。さあそこにかけ給え。」とおっしゃりながら、ご自分も椅子に腰をおろされた。——しかし先生の眼は、何ものにもごまかされることのない眼。相手の行為や感情の裏表を一気に見抜いてしまう、あの大津順吉、時任謙作の眼を思うと、たかの知れたわたしの『志賀直哉研究』を、先生に見ていただこうなどと考えた自分の思い上った企らみ。論文の風呂敷包みを膝の上に乗せたまま、羞しさをこえて、恐々たる気持に陥っていた。

ストーブはあかあかともえていた。ここは先生の書斎兼応接間らしく、先生は窓ぎわのテーブルを背にした位置の椅子に腰かけておられ、ストーブをかこむ方たちの方を指さして、「これ、親類のもの。」と、わたしを固ぐるしくさせまいというご配慮もあってのことか、先生は話題を、わたしが座のなかに加わる以前からの話のつづきを、自然にくったくなくつづけられた。

「留女子もいやだというし、おれもいやだったね。」

話は留女子さんの見合いをされての話らしい。すると婦人の一人が、

「兄さんの虫がすかないんだわ。」

と云って笑われた。わたしは思った。婦人が「兄さん」というからには、このご婦人は先生の妹の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com